

最優秀賞受賞にあたって

埼玉県所沢市立三ヶ島中学校

ぬま た よし ゆき
沼田 芳行

このたびは栄えある第34回東書教育賞最優秀賞を受賞させていただき、大変光栄に思っております。ありがとうございました。

私の勤務校である所沢市立三ヶ島中学校は、生徒数423名、14クラスの中規模校です。南にトトロの森を抱え、近くにはプロ野球埼玉西武ライオンズの球場がある、自然豊かな環境にあります。着任当初からの課題であった学力向上策として、「考える、考えたことを口にする」という活動を繰り返すことで、思考力、表現力の伸長に視点を当て、知識・技能の獲得へつなげ、やがてそれが朝鑑賞という活動につながりました。

本校が行う朝鑑賞は、毎週金曜日の朝、ホームルーム前の10分間、美大生や美術科の高校生が描いた絵画を見ながら、全校で教師が生徒と自由に意見を言い合う夢の時間です。なぜ朝鑑賞を始めたのかといいますと、もともと私が教諭時代、同僚であった現武蔵野美術大学、三澤一実教授と、互いに青年教師時代から夢見ていた、「仮題）私版、日本の教育改革20年構想」によるものです(笑)。

いまから30年前、荒れる中学に勤めながら、いつも笑顔で、大人も子どももつながりあえる、そんな学校を創りたいと語り合っていました。

しかし、朝鑑賞を始めた当初はその10分間がうまくいきませんでした。子どものほうが柔軟で、絵から得られる情報だけでなく、人の感じ方、考え方を楽しむようになりました。一人の

人間を見つめていく、個に応じた対応も集団の中で培う教師の重要なスキルへのヒントとなりました。皆同じではない。全く違う他者。異質性に気づき、多様性を認める空間として安心できる学校こそ、個から集団へつながる協調空間を創り出す、いわばコロンブスの卵の論理のように、われわれ教師自身の意識が氷解しました。

そうした中で朝鑑賞は、個性、多様性、異質性をもった一人一人を大事にし、輝く自分で行われる必然性のある活動であることがわかり、この活動を継続する意義を見出していったのです。

この取り組みが日本の教育の転換点になればと感じています。ぜひとも皆様には、一度チームミカジマを訪ねていただきたいと思います。

この実践は、チームミカジマと武蔵野美術大学の強力なタッグ、そして「学び創造アクティブプラン」という先進的な研究システムで支えていただいた所沢市教育委員会、本校の保護者、地域ぐるみで行ってまとめたものです。今日の受賞はあくまでも通過点として、明日の子どもたちのために、面白くて、楽しくて、学びたいという気持ちになる学校づくりを、また明日から一歩ずつ進めてまいります。

本日は誠にありがとうございました。